

会員企業・大学が実習成果を報告 会員同士が3年ぶりに対面で交流

経済同友会インターンシップ推進協会は12月5日、2022年度実習成果報告会を開催した。新規入会の企業2社大学1校が事例報告を行い、学生の受け入れおよび送り出し双方の取り組み状況を紹介した。また、今回から実施した学生・企業向けアンケートの結果も報告する。



開会挨拶

正会員企業5社が新たに入会
今後は院生の参加も検討し
より一層の産学連携を目指す



横尾 敬介

経済同友会インターンシップ推進協会 代表理事
経済同友会 終身幹事

経済同友会インターンシップ推進協会が毎年主催している「経済同友会インターンシップ」は、2019年4月の協会発足から今年で4回目、2016年に経済同友会の事業として開始してからは通算で7回目の開催となった。

夏に行われた実習状況は、昨年度が21社・18大学等、学生111人の参加であったのに対し、今年度は23社・19大学等、学生152人となり、学生参加者が大幅に増えた。

本日の「実習成果報告会」の目的は、経済同友会インターンシップに関する企業と大学の取り組み、実習における成果や課題について会員同士が相互に共有し、今後の改善と発展につなげていくことにある。今回は新規入会企業であ

る双日および武田薬品工業に、同じく新規入会の京都橘大学に報告をお願いした。それぞれの苦労や工夫した取り組みなどについて、皆さまと共有していきたい。

経済同友会インターンシップを拡大していくためには学生を受け入れる企業の参加が重要なことから、新規会員企業の開拓に注力してきた。近年、ウィズコロナへの対応が進む社会・経済情勢の中、ようやく企業業績にも回復傾向がみられ、採用控えといった厳しい状況から脱しつつあるなど好材料が出始めている。

2022年12月5日時点で、本協会趣旨に賛同いただいた5社が新たに入会され、正会員企業数は29社になった。これからは新規企業の入会勧誘に注力しつつ、価値観を共有する新たな大学を会員として迎えるなど、より多くの学生が企業実習に参加できるよう活動していきたい。

さらに新規事業としては、大学院修士1年生を対象としたインターンシップの検討を進めており、学部から大学院まで一層の産学連携の拡大を図っていきたい。

実習成果とアンケート結果の考察

今年度より、実習に参加した学生と企業に対して実習後アンケートを行った。

学生参加者152人のうち148人が回答、参加満足度は「非常に満足」「やや満足」が99.3%と高い評価を得た。「自分が社会に出たときの姿を明確にできた」「他大学の学生とのワークは新鮮でかつ刺激的だった」「幅広い分野で深い学びをしたいと考えるようになった」などのコメントが寄せられた。

実習先企業のフォローやフィードバックの満足度を聞いたところ、98.6%が満足としており、「毎日の日報に関して丁寧に返信をいただいた」「グループワークおよび個人へのフィードバックが素晴らしかった」「ここまで客観的に社会人の方

から評価をいただける機会はなかったので満足」といった声が聞かれた。一方、「担当者の方々のフィードバックが全体的に甘めだった」との評価もあった。

所属大学に対するサポート満足度は89.9%と、一定の評価を確認できた。経済同友会インターンシップを通じた成長実感については満足度100%と高い評価だった（p10図参照）。

その他の意見として、オンライン型の実習に参加した学生から、対面での実施を希望する声が多数上がったほか、実習期間の延長を求める声も多かった。また、経済同友会や経済同友会インターンシップ推進協会の組織概要を知っ

た上で実習に臨みたいという意見もあった。

実習参加企業については23社中21社から回答を得、満足度は95.2%であった。「学生が非常に優秀」「企業の社会的責任に沿った取り組みとなった」「本インターンシップでの学びが今後の糧になったという言葉をいただき、やりがいを感じた」など充実したプログラムであったことがうかがえた。

さらに、「担当した社員の成長を促すことが成果として確認できた」「学生に就業体験の機会を提供することで、社会に貢献できた」など、実際に得られた成果や効果についても言及があった。ただ、コロナ禍において、「企業や大学との



会員企業・大学が3年ぶりに対面で交流し名刺交換した

情報交換の機会」を十分に確保できなかった点は課題でありこれらの結果を次年度の事業に活かしたい。

経済同友会インターンシップを通じた成長実感は100%

他大学の学生と交流したことで、自身の新たな強みと弱みを発見することができた。また、自分の専門分野や興味・関心があることを自信を持って学ぶことが、今の私ができることであると実感できた

大きな成果として言語化する能力をかなり高めることができた。他の学生の意見をまとめる作業の中で、相手の意見を自分の言葉で表すことと、それに相違がないように注意することの二つを意識し、以前より正確に伝える技術を習得できた

毎日の些細な行動が自分の学びにつながっていくということを実感した。2週間で大きな成果を挙げられたというわけではないが、自分の意識が大きく変わった点で成長を実感できた

今後の学生生活での目標が明確化され、ものの見方や考え方が変化した

企業で働く社員の一員であるという自覚が芽生え、当事者意識を持って取り組むことができるようになった。「働きたい」と自分の意志で考えるようになり、「働く」概念が変化した

ダイバーシティ&インクルージョンに向けた働き掛けやライフプランニングといった、大学では学ぶことのできないリアルな知識も得ることができた

やや成長したと
実感できる

27人

とても成長したと
実感できる

121人

*実習後アンケート結果より。
回答者数148人(回答率97.4%)

講評



企業・大学共に きめ細やかなフォロー

井上 示恩 氏

日本学生支援機構 学生生活部
部長

双日について、インターンシップ本体だけではなく、事前事後のフォローなどが大変きめ細やかに行われていた。また、特に内定者向けに提供されているコンテンツをインターンシップで実際に体験させたことは、学生たちにとっても臨場感あふれるものになったのではないかなと思う。そうした経験を通して、今後自分が何を行っていくべきかということがより分かるキャリア教育、インターンシップの実践になったのではないかと考えている。

続いて、武田薬品工業について、グローバル化に向けた幅広い事業を展開されている中、学生たちに対しても英語

だけでのコマを設けられるなど、大変チャレンジングな素晴らしいインターンシップだったと思う。特に英語力がなくても、将来は英語を使って仕事をしていきたいという意欲のある学生を対象にしているという話を聞き、優れた学生たちのやる気を喚起する取り組みを実施していただいたのではないかな。

次に、京都橘大学ではインターンシップに参加した学生に対して、事前事後で大変きめ細やかな指導をされていると感じた。多くの大学が定員や予算の条件が厳しい中、企業の協力を得て少数精鋭でインターンシップに取り組んでいるが、その中でも工夫を凝らし、素晴らしい取り組みを実施されていることに大変感動した。

本日の報告を受けて、日本学生支援機構としても、皆さまと共同歩調で、今後とも末永くキャリア教育やインターンシップの支援に関する取り組みをさせていただければ大変ありがたい。(次ページ以降に各事例報告を掲載)

会員企業・大学による成果報告

【企業事例報告①】

双日

長島 裕子 氏

人事部 グローバル・人材育成課
キャリアコンサルタント



講義型と体験型のバランスに考慮し、ディスカッション時間を充実

早期に学生の就業観形成を促し、キャリア形成の支援、国内の経済発展の一助としての社会貢献活動を行うことを目的として、8月22日～26日の5日間、対面式で実施した。参加大学は8大学、2年生が10人で、理系・文系問わず、さまざまな学部の学生が参加した。

留意点として、新型コロナウイルス感染防止対策はもちろん、心理的安全性を確保した。また、講義型と体験型のプログラムのバランスを考え、3日目には港湾・税関見学を取り入れた。さらにディスカッションの時間をできるだけ多く取るよう心掛けた。

プログラムについては、初日に総合商社総論と当社の歴史、国内外の事業例の説明を行い、2日目には攻めと守りの広報活動を紹介した。攻めの広報ではテレビや新聞、財界誌、ツイッターなどを通じて当社の活動を理解してもらうこと、守りの広報では、長年かけてつくり上げた企業イメージが一瞬で崩れ落ちてしまうことがないように危機管理意識の啓発を行っていることを伝えた。この内容は学生にも非常に響き、特にSNSについては活発にディスカッションしているところが見受けられた。

4日目は1コマ目にDXに向けた取り組みを紹介し、2コマ目のグローバルコミュニケーション研修でハイコンテキストとローコンテキストのカルチャーについて学んでもらった。そして業務体験、海外駐在経験と続き、海外駐在経験では赴任中に感じた文化差異や、価値観が多様化している中で物事を進める難しさを伝え、学生たちも非常に真剣に聞いてくれた。最終日にはキャリアについてのディスカッションと並行して個人面談を行うことで、就職することへの不安解消にもつなげられたと思う。

振り返りについては、毎日講義終了後に学生自身の学び・気づきを整理する時間として意見の共有を行った。

総合商社のグローバルリーダーシップ

自分の強み(弱み)は何か？
自分の価値観は何か？
グローバルな環境下で、自分の強みをどう活かし、どのようにリーダーシップを発揮していきたいか？

個人ワーク
(10分)

発表
(20分)

相互理解

コミュニケーション力

巻き込み力

～問いかけ～

- 世界で起きている変化・事象に対する感度と好奇心を持つことができるか？
- 多様性を尊重し、柔軟に受け入れる受容力を持つことができるか？
- 語学力を含めたコミュニケーション能力を持つことができるか？
- 夢(目標)を共有し、相互補完・協力し合える“信頼関係”ネットワークをどれだけ多く、深く築くことができるか？

学生一人ひとりの成長速度や意欲の向上につながる取り組みができるよう、プログラムを検証

印象に残ったプログラムについて、学生にアンケートを行ったところ、1位は3日目の「HassoJitzプロジェクト概要及び内定者HassoJitz事例紹介」と、グローバル人材育成課課長が自ら登壇して海外での経験を話した最終日の「総合商社のグローバルリーダーシップとは」だった。

「HassoJitz」はもともと全社員向けのプロジェクトで、「発想力」「実現力」「創造力」をミックスした事業を発想し、成果につなげていくという内容である。これを「同期との関係構築&双日の理解&キャリアプランの創造」を目的として、内定者の研修時に実施しており、今回は1年目の社員自らが内定時に発想した事例を学生たちに紹介した。学生たちは真剣に話に聞き入り、社員も教える側として楽しそうに取り組んでいた。

「総合商社のグローバルリーダーシップとは」では、「自分の強み(弱み)や価値観は何か」「グローバルな環境下で自分の強みをどう活かし、どのようにリーダーシップを発揮していきたいか」などをテーマに個人ワークとディスカッションを行い、その上で「相互理解」「コミュニケーション力」「巻き込み力」の三つが大切だと説いた。

今回の実施結果について、学生からは「自分のキャリアを見つめる大きなきっかけとなりました」などの感想が、また登壇社員からは「自身の意見を発信すると同時に、他者の考えに刺激を受けることで、学生の視野を広げることができた」などの声もあり、非常に満足度が高い取り組みだったことがうかがえる。

これから次年度に向けて、学生一人ひとりの成長速度や意欲の向上にもつなげる取り組みができるよう、検証を続けていきたい。

【企業事例報告②】

武田薬品工業

新田 二郎 氏

グローバルマニュファクチャリング 光工場HR
サイトリーダー



グローバルな環境でプレゼンスを示す必要性と 製造の本質を理解するためのプログラムを実施

武田薬品工業は大阪で創業して240年が経過した長寿企業であり、現在は東京・日本橋に本社を構えている。現在、売上の半分は米国で、日本人社員数は全社員の10%ほどであり、グローバルな環境で業務を行っている。

今回、8月29日～9月9日までの10日間でインターンシップを実施した。1週目はオンラインで、2週目は山口県にある光工場において対面形式で行った。理系の学生を中心に九つの大学から10人の参加があった。将来、製薬企業で働く意向を持った学生が多く、「ワクチンについて知りたい」などそれぞれに自分なりのテーマを持って参加してくれた。

1週目のオンラインプログラムでは、当社が大事にしている価値観、リーダーに求める価値観についてのワークショップや、グローバルな環境で日本人がどのようにプレゼンスを示していくかが課題になっているため、その必要性を理解し、自分の成長につなげてグローバルに活躍するイメージを持ってほしいと考え、「Cross Culture Training」を実施した。これは他国の文化をどう理解して、どのように発言・提案すればよいかを学んでもらうプログラムである。米国人の講師が英語で行ったため苦労した学生も多かったが、何とかやり遂げてくれた。

2週目は光工場では工場内の機能を説明し、実際に機械の動きをバーチャルリアリティーで学んでもらった。その後、レゴで車を作る「エクササイズ」を実施。チームに分かれて役割分担し、時間と個数の達成目標に向かってスタートするものの、最初はうまくいかない。どこにボトルネックがあるかを検証しつつ、時間を短くしたり、完成の個数を増やしたりという工夫が必要な内容になっている。このプログラムを通じて、ものを作ることをきちんと理解し、協力関係を結ぶことの大切さを感じてもらえたと思う。

2週目の3日目には、品質部門で仕事体験を実施した。実際に工場での仕事を体験することで、そこで働く社員と交流を持つことができ、どのような価値観で働いているかを理解してもらえたという手応えがあった。

プログラムハイライト

製薬会社の機能

- ◆製薬企業には、創薬、開発、製造、販売等の機能があり、それぞれが世界中に存在しているため、必然的に協力しなければ薬が患者に届かないことが分かった
- ◆製造以外にも製造にかかわっている機能（広報、EHS、Supply Chainなど）が協力していることが理解できた

Cross Culture Training

- ◆グローバルのメンバーと一緒に仕事をする上で、文化的な違いがあり、どのように行動すべきかを学び、そして行動することが重要だと感じた
- ◆英語での発言が求められ、とても刺激的だった

製造について学ぶLEGOエクササイズ

- ◆最初はうまくいかなかったし、自分もメンバーに遠慮していたところがあった
- ◆制限時間内に製造するために、メンバーとしっかり意見をぶつけて合って、役割分担をして行動すればよいことを学んだ

工場の仕事体験

- ◆VRでの作業体験は面白かった
- ◆品質部門の実際の品質検査を体験したが、人の体に入る薬であるからこそ、厳格かつ厳密な品質管理が絶対に必要なことを理解できた

価値観を共有した上で、 自分に合っているかどうかを感じる機会に

学生たちはそれぞれ興味のある分野に非常に積極的に参加してくれて、日本だけではなくグローバルの他の関係者ともうまく協働しなければならないことを理解してくれたと思う。

今回は製造工場での研修がメインだったが、神奈川県にある開発部門や本社部門、営業部門などの機能も紹介して、キャリアの広がりについても伝えた。

今回のインターンシップの成果としては、参加学生のコメントにもあったように、実際に働くイメージを持ってもらうことができたことはもちろん、製薬企業として「患者さんのために」を常に全員が考えて働くという価値観を共有できたこと、また、それが学生自身に合うかどうかを感じ取ってもらう機会とできたことが一番良かったのではないと思う。

また、私自身もはっとさせられたが、学生から「こんなに良いことをしているのに、なぜもっとみんなに知らせないのですか」という声が上がった。今の学生にとってはあまりなじみがない会社なのだからということが分かり、企業広告など学生に向けて何か対応しなければいけないという気付きもあった。

今回、非常に優秀な学生に参加してもらえたことで、社員にとっても刺激的な取り組みとなった。可能であれば今後も続けていきたい。

【大学事例報告】

京都橘大学

牧 和生 氏

経済学部
准教授



予想以上のエントリー数に
早めのスケジュールで参加学生を決定

経済同友会インターンシップは今回が初参加だったが、教員から学生に積極的に声を掛けてもらったこともあり、予想よりも多いエントリーがあった。応募者75人中、書類選考通過20人、最終的には面接で6人の学生を選んだ。残念ながら今回縁がなかった14人の学生に対しては個別にフィードバックを実施した。

募集・選考スケジュールは少し早めに設定し、説明会を1月中に3回に分けて実施した。希望する学生には1月21日～2月13日の期間内に事前にFormsで登録してもらい、その内容を基に書類選考、そして最終面接を経て、4月8日にインターンシップに進む学生を発表した。

まず書類選考では、インターンシップを通じて何を学びたいか、希望する事業所、本人の成長プランを重視した。さらに面接に進んだ学生には、大学生活で力を入れたこと、そこから学んだこと、経済同友会インターンシップに参加できた場合のビジョンが明確かどうか、そしてインターンシップでの経験を大学生活にどう活かすかを重点的に問うた。面接では1人7分以内でプレゼンテーションを行ってもらい、それに対して面接委員と質疑応答の時間を10分設けた。特に希望するインターンシップ先が一緒になった学生については大学の代表として実習を行い、その成果が他の模範となりそうな学生には加点する形で採点を行った。

事前学習では、教員によって内容に違いが出ないように、必ず情報を共有してもらい、課題の内容や期限も全て統一した。6月第1週からインターンシップの講義を開始し、ビジネスマナーや業界・企業研究などの動画視聴や対面指導を行った。自己紹介などを通じて学生同士が情報を共有し、さらに教員と学生も気軽にコミュニケーションを取れる関係の構築を目指した。その中で、エントリーシートと業界・企業研究シートについて学生同士のピアティーチングを行い、再提出したものを教員がチェックするという、きめ細かいケアを行った。

インターンシップ直前の対面指導では、インターンシップで何を得たいか、何に気を付けなければいけないかを学

インターンシップの成果

学生に期待したこと

- ①働くことへの恐怖感をなくし、将来の進路の可能性を広げてくること
- ②コミュニケーションをしっかりと取ること
- ③失敗を経験してくること

- ・単なる職業体験ではなく、社会人に必要なスキルと現状との距離の把握、失敗から学ぶことが本科目の重要な「学び」であると考える
- ・自分には何が足りないのか、何が強みになりうるのかという「ヒント」を学生は実習を通じて得られており、残りの大学生活をどのように過ごせばよいかという目標も定まっているように感じた
- ・特に実習後のクラス内発表会では堂々としており、かつ言葉に説得力のある報告ができていた。教員として学生の成長を実感できたのは、大変喜ばしいことであった

生同士で共有し、さらにその後、本学キャリアセンターで5回に分けてキャリア形成プログラムを実施した。

「インターチカ」を活用した振り返りに注力
就職活動などにも応用できる手応えあり

事後学習では、振り返りのためのオンデマンドの動画視聴後、「インターチカ」(「インターンシップで力を入れたこと」の略)のワークシートを学生に配布した。それを元に各自が体験してきた内容を言語化し、提出してもらった。本学ではインターチカを活用した振り返りの実施に力を入れており、キャリア開発のフレームワークの中でも特に「偶然活用型」と「目標逆算型」を強調している。自分の目標を実現するためにはどうすればよいかを最終報告会で発表してもらったが、インターチカの活用はインターンシップだけではなく、就職活動やそれ以外にも応用できる効果があったと考えている。

インターンシップを通じて教員が学生に期待したことは「働くことへの恐怖心をなくし、将来の進路の可能性を広げること」「コミュニケーションをしっかりと取ること」「失敗を経験してくること」の三つだ。最終報告会では、その期待に応えるかのように自信に満ちた様子で、堂々と自分の成果を報告していたのがとても印象的だった。

また、事前・事後の学習について、必要な部分は対面指導し、繰り返し視聴が必要なところはオンデマンドで行い、うまく適用できたと思う。特にビジネスマナーやリスクマネジメントの内容は一度見ただけでは頭に残らないので、いつでも自由に見直すことができるよう、オンデマンドにした点は学生からも好評だった。